

「満洲」経験の歴史社会学的考察

——「満洲」同窓会の事例をとおして——

坂 部 晶 子

はじめに

植民地の歴史は、従来、植民地宗主国の帝国主義的展開の延長線上でとらえられてきた。戦後の日本における「満洲」研究についても例外ではなく、歴史学の分野からは、植民地侵略と支配の実態が、日本の国策や制度の帝国主義的膨張として政治的経済的側面に基礎づけられて論じられてきた。¹⁾これらは傀儡国家として「満洲国」をとらえるが、日本が植民地にたいして何をしたのかという角度からの研究であった。

近年では、「満洲国」という現象そのものをより正面から論じる研究も多くなっている。²⁾これらの研究ではたんに日本の帝国主義史の延長線上にではなく、「満洲国」をひとつの植民地国家という現象としてとりあげ、宗主国の状況と植民地の状況の相互作用のなかで分析しようとするものである。さらには「満洲国」という国家でなく空間としての「満洲」（現中国東北区）に焦点をあて、そこにかかわった諸民族の存在に光をあてた研究などもでてきている。³⁾しかし、これらの歴史的研究の多くに共通するのは、国家史、制度史としての植民地状況への視点である。

たしかに、コロニアリズムという現象と近代の国民国家の形成と展開は切り離せない。しかし、このような日本の帝国主義や植民地国家の制度的側面といったマクロな植民地の構造の分析に主眼がおかれるなかで、その歴史のひとつとしての人生を生き、植民地という状況を楽しみ、あるいは翻弄され、その展開を個人として担った無名の日本人たちの経験そのものが、正面からとりあげられることは少なかったといえるだろう。そのためにここでは、「満洲」における日本人の植民地での日常生活の記憶にスポットを当ててみよう。植民者の日常生活の記憶は、それらが無意識的に生きられる領域であるために、帝国主義の侵略の論理、植民していく側の論理を抜けだしきれないという限界を持

¹⁾満洲移民史研究会、一九七六など。

²⁾たとえば代表的なものに、「満洲国」の政治体制を関東軍、天皇制国家、中国皇帝および近代中国との混成による「怪物キメラ」として表現した山室信一の研究（一九九三）や、日本史、中国史、朝鮮史の各分野からアプローチした京都大学人文科学研究所の共同研究（山本、一九九五）などが挙げられる。

³⁾塚瀬、一九九八。

つが、しかし植民地支配から敗戦、復興といった大きな歴史の変動を自らの人生と重ねて生きてきた植民者個人の小さな物語を支える場所としても、とりだしてみることができるのである。

以下の引用は、戦後五〇年を振り返って書かれた「満洲」経験の語りの一節である。

「私が十二歳の頃のお正月でした。校長先生のお話を聞き、お菓子をいただいて下校しました。…家の近くまで帰ると中国人（その頃は満人、ニーヤンと言っていました）の子供が二人、十歳くらいの男の子とその弟でしょうか、落葉を集めているのです。…どうしようかと考えた末、私は決心してお菓子の袋を「進上（シンジョウ）」と言ってお兄ちゃんの方にあげました。「謝々（シェシェ）、謝々」と何度も言って受け取りました。私は兄弟がいかにも嬉しそうに喜んだことがとても悲しくなりました。…とても恥ずかしくて、心が重くてしかたなくなりました。一枚の切り取った絵のようにその日の光景を思い出します。…思い出はやりきれなく、重く黒くのしかかってくるのです。」（久保田須彌「同じ子供なのに」⁴⁾

ここには、植民地状況で暮らす異民族への違和感、自身の日常の感情に亀裂をもたらすような異民族との接触が表現されている。それらは、異民族、被植民地国の人々への自分自身の直接的な加害性の認識ではないが、かといって自身の存在とも無縁のものではない。このようなかたちで想起されてくる植民地の日常生活世界のなかに、体系的な歴史記述がもたらすはっきりとした歴史の物語のなかには位置づけられない、自分自身と過去との関わりを読み取ることができる。

植民地の生活世界の記憶の内実は、具体的にいえば、「満洲」の都市での市民生活に関連しているものが多い。大連、「奉天」、「新京」、ハルビンといった「満洲」の大都市は、二〇世紀初頭以降に大規模に開発された植民地都市である。そこでは、新しい実験的な技術や生活様式がもちこまれ、当時の日本内地よりもさらに近代的な都会生活があったという。⁵⁾

「満洲」へと渡った日系の植民者たちには、「満洲国」の高級官僚や軍人といった植民地統治に直接関与した人々、あるいは国策としての「満洲」への移民送出事業の一環で送りこまれた農業移民といった、国家権力の中核や末端としてそのシステムのなかで動いた人々のほかに、下層の官吏、役人たち、満鉄に代表される日系企業の一般社員や、小規模な個人経営の商工業者など、国家の直接的な関与を離れた「自発的な」植民者も数多くいた。彼らの多くは、「満洲」の植民地都市の日本人市民であった。彼らはある意味で、最も「自由で近代的な」植民地状況を享受し、それを日常生活として生きたのである。このような植民者にとっての「満洲」での日常生活をどのように想起し、語るのか

⁴⁾ 著者への手紙に同封されていたエッセイより。

⁵⁾ 当事者の回想としては数多くあるが、そのひとつとして、原政子（一九九五）による自由な少女時代の思い出など。また建築史、都市計画論の分野からの植民地都市の研究が、植民地「満洲」の都市の生活という領域にはやくから近接していったことは興味深い。（西沢、一九九六、越沢、一九八八など。）

ということのなかに、現在でも生きられた植民者当事者にとっての植民地「満洲」経験があるといえるだろう。

ポストコロニアル論は、植民地の歴史をすでに過ぎ去った過去のものとして捉えるのではなく、現在のわたしたちの現実を規定する生きられた経験であると考ええる立場である。そこでは、植民された側の国の人々が、その歴史を踏まえたうえでその後の歴史をどう生きるか、ということに焦点があった。しかし、植民地の支配—被支配という経験が、植民された側の人々、植民していった側の人々の双方に関わりがあり、彼らのその後の生に影響を与えているとするなら、コロニアリズムは植民していった側の人々の問題であるはずである。コロニアリズムのなかで生きた現実の経験が、植民していった側の人々、ことにその当事者たちの、価値観、世界観、社会意識といったものにどのような影響を与えているかをとらえる必要がある。上述したような植民地の日常性という主題は、このような問題を考える糸口となると思われる。

本稿では、このような主題を考えるための準備作業として、戦後における「満洲」への植民者の集まりを分析していきたい。戦後日本社会において、「満洲」からの引揚者たちにとって自らの植民地での経験を共有できるほぼ唯一の場所は、その当事者同士の集まりである「満洲」関連の同窓会であった。この同窓会の集団としての性格とその活動をとおして、かつての植民者が、その植民地での経験をどのように想起しているのか、しないでいるのかを描きたい。

1. 植民者の戦後

日本と「満洲」と呼ばれた地域との関わりが、国家レベルでの歴史上に現われるのは、日露戦争における対立收拾のための、一九〇五年（明治三十八年）のポーツマス講和条約であろう。日本はこの時、中国（当時清国）の東北部における、遼東租借権と東清鉄道南部支線をロシアから手にいれた。日本は、この遼東租借地（遼東半島の南半分、「関東州」と呼ばれる）と鉄道とその付属地にたいして、まず植民地経営の足場を築く。さらに第一次世界大戦中に今度は中華民国へ押し付けた「二十一ヶ条要求」のなかで、租借権の期限延長を条件とし、しだいに「満洲」での権益を拡大していく。

「満洲国」は、一九三二年三月一日に成立し一九四五年八月一八日まで存在した。日本政府にとってはソ連の極東進出にとっての防波堤であり、資源不足のなかでの兵站基地としての役割が期待されていた。その地域は、現在の中国における遼寧省、吉林省、黒龍江省全域に及んでいる。一九四五年の日本の敗戦によって、この広大な地域への五〇年に及ぶ日本人の植民は終わる。そして、戦後五年ほどのあいだにこの日本の植民地域から大半の日本人が引揚げている。「満洲」「大連」からの日本人の引揚者は一二〇万人に及んだ。⁹⁾

1-1. 「満洲」からの引揚者

「満洲国」崩壊以降の植民者の生活は、歴史学その他の分野ではほとんど取りあげられていない。社会学では、蘭信三の「満洲」移民の研究がほぼ唯一のものである。蘭は、「満洲」からの帰国者たちへの実際の聞き取りを中心に、「満洲」経験者の戦後の生活について言及している。

彼が対象としているのは「満洲」への農業移民である。「満洲」への農業開拓団は、「分村移民」のように日本内地での同村出身者からなるものもあったし、「満洲」においては共同で入植し開拓団の経営を行っているなど、団員間の繋がりは既成の村落での日常生活の共同性を引き継いでいる。取り上げられているのは「熊本県東陽開拓農協」の事例であるが、この村は、一九四〇年に集団での開拓移民として「満洲」へ入植し、その後、ソ連の進攻からの逃亡、引き揚げに際してその集団性をもとによく生き延び、日本へ帰国後一九四七年に戦後の緊急開拓事業にもとづく開拓村落として国内に再入植している。「満洲」での開拓集団が、戦後における再集団化の母体となった事例である。この事例では、戦後においてもとくにその生活基盤そのものも共有している点で、その集合性は強固に継続されている。周囲の多くの開拓団が数十回におよぶ「襲撃」や疫病の発生などの混乱により開拓地を離れて難民化するなかで、この開拓団では、開拓地にとどまり、共同でその状況を切り抜けたという「満洲」での経験が、戦後の生活苦のなかでの共同生活をささえる絆となったという。⁷⁾

蘭は、「満洲」において生死を共にしたという経験的な絆が、戦後の日本社会での彼らの共同性へ及ぼす影響を重視している。しかし、「満洲」からの引揚者のなかで、その植民地での経験を絆にして戦後においても「生活のための共同性」を維持していった集団性はむしろ例外的な部類に属する。敗戦による引揚げという過程をつうじて、植民者の生活空間は「満洲」から日本へ移しかえられ、「満洲」での生活基盤や共同性はその根拠を失っている。⁸⁾彼らの「満洲」での社会関係や生活基盤、経験的な絆の多様な形式は捨象され、むしろ、それらはすべて「引揚者」というカテゴリーに一元化される。そこでは、日本政府の意向を受けた植民地政策の推進者も、「満洲国」での民族協和に燃えた建国運動への参加者も、自発的な渡満者も、国策としての開拓農民も、すべて一括して「引揚者」としてとらえられる。「満洲」からの帰国者たちは、戦後日本へ引き揚げ以降、かつての内地の家族や親類をたより故郷へ帰るもの、あるいは都会へ移りすむものなど新しく移住先での生活を始めていっ

⁶⁾厚生省援護局、一九七七、六八九一六九〇頁。

集団引揚げのあとにも、戦犯として中国、ソ連に残された人々、中国での留用者、「残留孤児・残留婦人」として残された人々もいる。

⁷⁾蘭、一九九四、一九四一―二二七頁。

⁸⁾「満洲国」を日本の植民地支配の一連の系譜の上に位置づけるという視点も当然ありうる。台湾、朝鮮、「満洲」、そして日本の戦後社会へといたる、社会統制、統治のメカニズムの系譜を跡づけるという作業については、山室（一九九八）を参照。ここでは、そのようなメタレベルの社会統制上での連続性ではなく、人々の生活の実体的な断絶をさす。

た。それは、「満洲」からの帰国者という範疇とは関係なく、「引揚者」一般としての戦後の日本社会への再適応過程であり、生活の立て直しの過程であった。

1-2. 植民地経験の遍在性と言説の混乱

植民地経験者は、戦後の日本社会においてその遍在性が特徴といえる。「満洲」を含めて台湾、朝鮮、中国大陆本土、南洋などからの引揚げ者の大半は敗戦後数年間に集中的に帰国している。軍人も含めた正規の引揚げ手続きを行った引揚げ者は、六〇〇万人以上であり、そのうち一九四六年末までに引揚げ手続きをした者が五〇〇万人余、その後三年ほどのあいだに一〇〇万人以上が帰国している。⁹⁾そのうち関東州（大連）、中国東北地区（「満洲」）からの引揚げ者は軍人軍属を含めて一二七万人、全引揚げ者の約二〇％にのぼる。これは当時の日本人口の一％以上である。

これら多くの植民者たちが帰郷し、日本内地に引揚げ者が遍在するなかで、独立国家としての体裁をとり民族協和や王道楽土といった理想社会建設として喧伝された「満洲国」にかんする問題は、日本とのかかわりにおいて適切な位置づけを与えられなかった。¹⁰⁾歴史学においても「満洲国」が一つの歴史的な出来事として正面から分析されるようになったのは、近年のことである。¹¹⁾

その一方で、「満洲国」の建国に直接的に参与した日本人の当事者たちからは、「満洲国」を「理想国家」と位置づける語りが、語られ続けてきた。一九六〇年代には、「満洲国」の直接の当事者たちからの記録が数多く出版されるようになる。¹²⁾「満洲」経験者たちによる出版物の編集、出版の中心、とりわけ「満洲国」の歴史を当事者として記録に残しておこうとする行為の母体、表現行為の主体となっているのが、「満洲」関係者の集団である。「満洲」経験者たちの戦後日本におけるこの種の共同性を「記録のための共同性」と呼んでおく。このような「満洲」経験へのこだわりは日本の植民地のなかでもことに、道義国家建設という名目をもった「満洲」への植民に特徴的なものともいえる。¹³⁾

「満洲」関係者の団体といっても、その集まりがもつ性格は多様である。「満洲」関連団体のなか

⁹⁾厚生省援護局、一九七七。

¹⁰⁾たとえば、竹内好は一九六三年に次のように記している。「『満洲国』をでっちあげた日本国家は、『満洲国』の葬式を出していない。口をぬぐって知らん顔をしている。これは歴史および理性に対する背信行為だ。」（竹内好、一九六三年初出／一九八〇年、四一六頁）

¹¹⁾前出の山本（一九九五）、山室（一九九三）など。

¹²⁾『あゝ満洲 国づくり産業開発者の手記』（満洲回顧集刊行会、一九六五）、『大いなる哉 満洲』（大同学院史編纂委員会、一九六六）、『満洲国史・総論』（満洲国史編纂刊行会編、一九七〇）、『満洲国史・各論』（満洲国史編纂刊行会編、一九七一）など。

¹³⁾本稿では、植民地経験のうちより基層的な部分である日常性に焦点を当てているため、この点については詳述しない。「満洲国」の建国理念に関わる植民地経験については、拙稿「植民地の記憶の社会学」（『ソシオロジ』137号掲載予定）で取り上げている。

には、このような歴史の「記録のための共同性」といった契機をその中心的な性格としてもつ集団とは異質な集まりも存在する。それらを、積極的に自己の「満洲」経験を意味づけて物語る主体とは区別して、表面的にはそのようにして語られた「満洲」のイメージを享受している層として捉えておくことができる。以下では、具体的にこのような層のなかに、「満洲」での日常生活世界の記憶を共有しあう側面を探っていくことにしたい。

2. 「満洲」の同窓会

2-1. 「満洲」関連メディアと「満洲」関連団体

戦後の日本社会のなかで「満洲」からの帰国者を結びつける公的な制度は存在しない。また、先の開拓団に見られた「生活のための共同性」を保つことも少ない。けれども彼らはいくつかのパターンで再集団化し、相互に連絡をとりあって、自発的に緩やかなネットワークを結んでいる。その象徴的な構成単位が、「満洲」関連の同窓会的な集まりであり、またそのネットワークを示唆するのが、回顧的な「満洲」での生活を描き出す出版物である。「満洲」の風景や都市の情景を写した写真集や、切符や紙幣、商品ラベルの写真やイラストなど過去の生活雑貨を集めた出版物というメディアは、とくに「満洲」経験者という限定された層をターゲットに出版されている。

そのようなメディアのひとつに、『遙かなる大地2 満洲再見』があり、この本の末尾に「満洲関連団体名簿」¹⁴⁾というリストが掲載されている。管見の限り、これは「満洲」関連の団体リストとしては最大のものであり、この名簿をもとに、「満洲」帰国者の団体にたいする調査を行った。一九九七年八月から九月にかけての、「満洲」関連団体へのアンケート調査である。

名簿上の「満洲関連団体」は二五三団体である。「名簿」には団体名と責任者の連絡先だけが掲載されており、名前だけではその団体の性格をつかめない。また、「名簿」の作成時点から一〇年以上経過している点も考慮し、同書の「協力者一覧」に重複して名前があるもの団体を対象とすることにした。アンケートを配布した団体総数は、一一九団体である。回収率は以下のとおりである（表1）

表1 「満洲」関連団体調査

		団体数	%
回答あり	現在活動中の団体	53	44.5
	現在活動していない団体	6	5.0
回答なし	転居・宛先不明等で回送されたもの	34	28.6
	返送なし	26	21.8

調査日時：1997年8月から9月にかけて発送
調査を依頼した団体総数：119団体

¹⁴⁾原明緒人、一九八五、一五一一一五七頁。

調査葉書を送付した団体の総数は一一九団体である。そのうち調査葉書を返送してきた団体は五九団体、回収率は四九．六％であった。五九団体のうち、現在も活動を行っている団体が五三団体（本稿末に団体一覧を掲載）で、活動を休止している団体が六団体¹⁵⁾であった。

調査葉書が返送されなかった団体が二六団体、転居・宛先不明等で調査葉書が返送されてきた団体が三四団体であった。回答があった団体から類推すると、「満洲」関連団体は、ほとんど実際の渡満経験者から構成されている。また「満洲」時代にもものごころのついていた実質的な渡満経験者は、若いコーホートでも七〇歳代前後になっており、「回送」「無回答」の団体のなかにも、すでに活動休止している団体やその集まり自体がなくなっている団体も多いと考えられる。

2-2. 同窓会としての再集団化

今回の調査でアンケートの葉書を回収できた団体を、「満洲」での機縁をもとに分類すると、「満洲」での学校（小学校から高等女学校、大学まで）の同窓会「満洲」での職場を同じくする集まり「満洲」での居住地域を同じくする集まり、その他に大別することができる。¹⁶⁾今回の調査結果のなかでは、「満洲」の学校時代の同窓会の占める割合が七割を越えた。（表2）現在では「満洲」関係者の集まりは「満洲」での学校を機縁を中心として（再）結合されていると考えておくことができる。

表2 団体類型別「満洲」関連団体数（総回答数53）

	団体数	%
「満洲」時代の学校の同窓会	39	73.6
「満洲」時代の職場を同じくする団体	8	15.1
「満洲」時代の居住地域を同じくする団体	3	5.7
不明	1	1.9
その他	2	3.8

さらに、アンケート結果を団体の設立年代順に並べて細かく見てみると、学校の同窓会のなかでも「建国大学同窓会」や「大同学院同窓会」¹⁷⁾などのように「満洲国」の中枢的教育機関を前身とするものは、戦後比較的早い時期（昭和二〇年代）に設立されている。あるいは、戦後の「満洲」経験者の集まりのなかでも、「満洲」関連資料の収集や関連団体の連絡などに大きな影響力をもった「国際

¹⁵⁾活動停止の理由は、関係者、責任者の死去、高齢等による。

¹⁶⁾その他に分類した団体のひとつは戦後に「引揚者の政治運動」を行ったという団体（「蜂の巣会」）と、もうひとつは「国際善隣協会」（注一八参照）である。

このリストは網羅的なものではない。「満洲」に関連する団体には他にも、開拓団や開拓女塾の仲間を中心としたもの（杉山、一九九六）、満洲経験者を中心に現在の日本での居住地近辺で集まっている団体といった集まりなどもある。

善隣協会」¹⁸⁾、また「関東州」の居住者を中心につくられた大規模な団体である「大連会」なども、戦後時間をおくことなく結成されている。(本稿末リスト参照)

これら比較的著名な「満洲」関連団体¹⁹⁾は、「満洲国」にかんする当事者の側からの公的な記録を残しておこうとする先に見た動きの主体とも重なりあう部分を持つ。またさまざまな団体のネットワークの中核としても重要な働きをしている。その意味では、これらの団体においては「記録のための共同性」という側面も重要なものであると思われる。

しかし一方で、これらの団体においても、親睦活動やたんに学校の同窓会としての活動もまた活発に行われている。また、その他の多くの「満洲」関連団体においては、「満洲」時代の職場や地域にもとづく集まりではあっても、その組織の実体はすでに失われたものであり、学校の卒業生たちが自分たちの過去をともに語りあい懐かしむという「同窓会」的な集まりという側面が強くなっている。そこで、「満洲」関連団体のこのような集まりの契機を、「想起のための共同性」としてとらえ、このような「満洲」関連団体を「満洲」の同窓会とよんでおく。

ところで、調査葉書を依頼した団体のうち、「活動停止」の状態のもの、あるいは返送されなかったもの、回送されたものには、職場関係の団体のものが多かった。職場を機縁とした集まりは、「満洲」時代を青年、壮年として過ごしたコーホートであり、その集まりは戦後五〇年を経るなかで次第に消滅していったと推測される。学校を機縁とした集まりは、世代的には「満洲」時代を小学生として過ごした世代までを含む。彼らは親に連れられて家族で移住したか、親の世代に「満洲」へ渡りそこで生まれた植民二世である。

「満洲」からの引揚者たちによるさまざまな機縁による集まりは、戦後半世紀を経るなかで、当事

¹⁷⁾大同学院は、「満洲国」の建設にあたってその理想主義的な夢の実現のための人材養成の学校であり、実際に満洲国官僚や全満僻村の自治体、民間の会社に到るまで四〇〇〇名もの卒業生を送りだした。(大同学院史編纂委員会、一九六六)

¹⁸⁾日系満洲国官吏の一人であった鳥谷寅雄の回想(鳥谷寅雄「満洲のむつみ」、満洲回顧集刊行会編、一九六五、六〇-六四頁)によれば、実際に満洲国の「商標局に出頭して、現実の空気の意外に冷たいのに啞然とし」た彼は、日満官吏が事務を離れて懇談する、私的な座談会を持つようになったという。その後彼が日本へ帰国したのち、日本の満洲関係者の集まりとして、岸信介を仲介に鮎川義介の出資で大規模に結成したのが、「満洲交友会」であり、「国際善隣協会」の前身である。

同会の沿革によれば、戦後は一九四七年に「中国をはじめアジア諸国との善隣友好に寄与するため再出発」したとある。中国や東南アジアの情勢の調査、研究や、日中間の環境調査、留学生の受け入れなど活発な事業を行っている。建国大学や大同学院の卒業生も多いという。同会の関連発行物には以下のようなものがある。

- ・国際善隣協会 1977-1997『善隣』No.1-No.244 (通巻511 1997年10月現在まで)
- ・国際善隣協会(国際善隣倶楽部) 1966-1977『善隣月報』No.136-No.267 (以後『善隣』と改題)
- (『善隣月報』の前誌として『倶楽部会報』『中国資料』などがあった)
- ・国際善隣倶楽部アジア資料室 1955-1957『善隣時評』No.2-No.34

¹⁹⁾ そのほかに有名なものとして「満鉄会」があるだろう。満鉄は二〇万人からなる社員を抱えた「満洲」最大の企業体であり、鉄道付属地の経営の一端を担った半政府的な集団である。「満鉄会」はそのもと満鉄の社員からなる。

者たちが亡くなっていくことで、当事者以外の人々に拡大していくことなく、「減ることはあっても増えることのない」集まりである。そしてその担い手の中心は、現在では、「満洲」時代を学生や子供として過ごした「若い」世代の人々、植民二世の世代へと移っているといえるだろう。

団体の規模は、最小で一〇人、最大で二〇〇〇〇人、平均で一三一人（突出して大規模の二〇〇〇〇人の団体を除けば、平均七四六人）である。中心となるのは数百人から千数百人の規模の集まりである。（表3）

団体設立年代の傾向は表4のようになる。全体の調査総数は少ないが、傾向として昭和二〇年代と昭和四〇年代に団体結成の高まりがみられる。昭和二〇年代の団体結成の経緯としては、敗戦、難民生活を経て引揚げてきた人々が、日本に帰りついてから互いの消息を確認しあうなかで、会を結成していくというところにある。また、昭和四〇年代における団体結成の背景としては、一九六〇年代をとおしての日本社会の復興と経済的繁栄が想定できる。生活が安定し社会全体が豊かになっていくなかで自らの過去の経験を振り返るようになっていく。このような動向は、「戦友会」の結成の傾向とも重なりあうものである。²⁰⁾

表3 人数別「満洲」関連団体数（総回答数53）

	団体数	%
10人以上100人未満	6	11.3
100人以上500人未満	14	26.4
500人以上1000人未満	13	24.5
1000人以上1500人未満	8	15.1
1500人以上3000人未満	7	13.2
10000人以上	1	1.9
無記載	4	7.5

表4 設立年代別「満洲」関連団体数（総回答数53）

	団体数	%
戦前	2	3.8
昭和20年代	20	37.7
昭和30年代	7	13.2
昭和40年代	11	20.8
昭和50年代以降	6	11.3
無記載	7	13.2

高橋三郎らによる「戦友会」の研究では、軍歌をうたい慰霊碑を建設し戦友をまつという「戦友会」にまつわる保守的国粋主義的なイメージにたいして、多数の戦友会へのアンケートと実際の総会への参加、観察をとおして、戦友会に集まる人々が、戦後社会が発展し安定していくなかで、過去の戦闘の経験やその戦闘のなかで失った戦友への思いに固着している様子、周囲の社会への違和感、さらにその戦後社会では否定された経験を共有しあう場所としての「戦友会」の性質を描き出している。それは戦後の日本社会が生みだした集まりであった。

このような対戦後社会とのかかわりにおいて、「満洲」からの引揚者の団体は「戦友会」と類似し

²⁰⁾戦友会の団体結成の動向にも、昭和二〇年代（前半）と昭和四〇年代（前半）に結成のピークがみられる。橋本満「『神まつり』としての戦友会」のなかの表1（高橋、一九八三、二六三頁）参照。

ている。「満洲」で暮らした人々もまた、戦後の日本社会への再適応が進むなかで、過去の植民地における体験に固着し、引揚者というラベリングにたいして、共通する経験をした人々の集まりのなかに自己確認の場所を見つけていったのではないだろうか。そこには、過去の否定された経験にもとづいて再集団化された集団という共通点がある。しかし、「戦友会」が戦闘という非日常的な体験をもとにしているのにたいして、「満洲」からの引揚者の団体は、植民地という（戦後社会においては）非日常的な場所を共有している一方でその地での学校や職場という日常生活のなかでの繋がりにもとづいて再集団化している。その意味で、より「同窓会」的側面が強いといえる。

2-3. 同窓会の活動

ここでは、「満洲」関連団体がどのような集団であるか、その主要な活動内容をとおしてより具体的にしておく。会の「主な活動」へのアンケートの回答をまとめると、その頻度によって以下（表5）のようになる。これらの活動は、一方では一般の学校の同窓会としての側面をもち、また一方で「満洲」という土地で生活した植民者の集まりという側面をもつ。人が年齢を重ね、自分の過去を振り返るという心情—「同窓会」は学校という制度が普遍化した近代社会において過去を回想するための一つの装置といえる—と、植民地での過去の生活の記憶を確認しようという心情との結びあわされたものである。

そこで、これらの活動を、「同窓会」という装置のなかで一般的なものから「満洲」へのこだわりの表れたものへという順に（1）現在の親睦、（2）過去の再現、（3）ノスタルジアの充足、という区分で見えていこう。資料としては、アンケートの答え、同窓会の会報、記念誌のほかに、アンケートの欄外への記入事項等も利用する。

表5 同窓会の主な活動

	活動内容	団体数
1	親睦会、同窓会、総会等の開催	43
2	会報の発行	33
3	記念文集の編纂	15
4	母校訪問、中国訪問	7
5	留学生支援	3

（注）アンケートの「主な活動」への回答、発行物等から作成。重複回答あり。

（1）現在の親睦

まず、活動中のほとんどの団体、同窓会が、会の主な活動として「総会」や「同窓会」といった年に一、二度行われる親睦会の開催を挙げている。会報の発行や名簿の作成も、会員相互の連絡をとり

あう手段という側面が強く、会員同士の現在の親睦に力点がおかれている。会報のなかの記事にも、最近の親睦会の報告や感想が大きな割合を占めている。

「母校なき同窓会が五十有余年を経て結束を維持していることは在外学校としては希有といふべきでしょう。残存同窓はいまや六百余人にすぎませんが、今後とも、同期同窓あい集う機会を少しでも多くして、互いに励まし合い二一世紀に向かって有終の美を飾るべくつとめたい」
(『ハルビン』一九九六年二月二八日第五十号)

アンケートの回答のなかでは、何らかの政治的社会的目的を想定されることへの疑念からか、「一般同窓会の範囲」²¹⁾と自己規定する団体もあり、その意味では「満洲」関連の同窓会といっても、過去の繋がりをもとに現在の親睦を深めるという同窓会的働きにかかわるところはない。この同窓会の開催をほぼ唯一の会の活動、目的としているところも多い。

(2) 過去の再現

次に大きな活動は、記念文集の刊行である。これもまた、卒業後三〇年、五〇年といった節目の年に行われる過去を回想するための一般的活動である。文集に収められた文章にも級友や教師、学校行事の思い出などが見られる。その一方で、ことに注目されるのは、これらの文集や会報なかに織り込まれた、彼らが暮らした「満洲」の街の地図の作成と、「満洲」時代のある時点（たとえば、終戦時）における人名録や名簿の作成という試みである。

たとえば、「本溪湖」という鉱工業の開発のために造られた都市がある。戦後五〇年が過ぎて、この街の日本人在住者の名簿がつくられている。それには「在溪時職業」「居住地区」が記載され、当時の事業所、学校等の組織別に編集され、以下のような序文が付されている。

「本溪湖開発当初からの在住者を記録する形での刊行を試みました。…終戦時、本溪湖には約2万人の日本人在住者がいました。開発以来の在住者を網羅するとしましたら、恐らく10万人を越す膨大なものになります。しかも開発当初の資料には完全なものがなく、また、戦後50年を経た現在、基礎資料の検収が思うに任せず…最終的に確認の出来た3,300人を越す方々を掲載することができました。本溪湖に一時期でも在住したという各人の足跡を記録しておくことの大きな意味をこの名簿で果たすことはできませんでしたが、今後ともできる限りの確認作業を継続し、より正確な名簿を確認させたいと考えております。」(本溪湖会編『本溪湖名簿平成7年9月10日現在』)

²¹⁾アンケートより。

ここでは、ひとりひとりの名前と所属がていねいに発掘され、その個人的な情報—その個々人がその場に存在したというだけの情報—が集積されるということに重点的な努力が払われている。それは、「満洲」という植民地の消滅によって、失われてしまった街、人、風景のイメージを再現してみると、その当時の相貌のもとに集散的に再現しようとする試みであるといえる。

これら「満洲」時代の名簿や街の地図へのこだわりと同様に、記念文集や会報に描かれた過去の思い出のなかにも、彼らが暮らした街や生活空間、そこにあった人と人との関係や人と環境とのかかわりの具体的なイメージを想起してみるという側面が強い。いいかえればこれら失われた過去の再現という作業のなかに、「満洲」の同窓会としての最も顕著な特徴をみることができる。

(3) ノスタルジアの充足

最近では、母校への訪問、中国への再訪というイベントを行う同窓会も現われている。これには、一九七二年の中国と日本の国交回復、一九八〇年代に急速に進展した海外観光旅行の日常化、中国の改革開放政策による開放都市の増加や観光客の受け入れの増加といった社会的背景も大きく関与している。このようななかで、観光旅行者としてかつての故郷「満洲」を訪れるという企画が浮上する。

一九八〇年代半ばになると、「大連へ夢の直行便が飛ぶ 二班に分かれ二百人が参加」²²⁾「れんぎょう、あかしやの季節に ふるさと大連訪問」²³⁾「大連定期直行便が実現」²⁴⁾といったタイトルの記事が、会報のトップとなる。

故郷再訪、母校訪問といったイベントは、それ自体では素朴なノスタルジアの充足かもしれない。しかし、かつての植民地を、現代のツーリズムによって気儘に歩きまわること、現代の中国人にとってみれば、不審当惑する出来事である。その意味で、中国訪問、母校訪問といったイベントは、「満洲」経験者にとってもひとつのリトマス試験紙の役割をはたしている。たとえば、

「私の友人たちで少女時代を過ごした大連を訪れる人が幾人もいます。彼ら、彼女たちが懐かしがって行っているとは思いません。でも、私は再び大連を訪れようとは思いません。行けません。」（久保田須彌「同じ子供なのに」²⁵⁾

という記述に見られるように、かつての故郷＝現代の中国を集団で気軽に観光旅行をするというイベ

²²⁾『大連会会報』第一二号、一九八五年。

²³⁾『大連会会報』第一三号、一九八六年。

²⁴⁾『大連会会報』第一四号、一九八七年。

²⁵⁾注四参照。

ントは、彼らの訪問が中国の人々にもたらす印象については同窓会のなかでも議論がある²⁶⁾ところであり、すべてのメンバーや同窓会で受け入れられているわけではない。

以上、大まかに三種類の傾向に整理して「満洲」関連団体の活動を見てきた。そのほかにも、「留学生の支援」「中国残留孤児・残留婦人の支援」「中国との友好活動」²⁷⁾などを挙げているところもある。しかし、一般にみられるものとしては、親睦会の開催と記念文集の発行が中心であるといえる。現在の仲間どうしの親睦のための「同窓会」や会報の発行といった一般的な同窓会の活動のほかには、「満洲」時代の思い出を語りあう、共有するという側面が特徴として見られる。

3. 想起の現場へー同窓会報における「満洲」の記憶

ここでは、ひとつの「満洲」の同窓会について、主にその会報の分析をとおして、かれらの「満洲」にかんする記憶をとりだしてみたい。これまで見てきたように、「満洲」の同窓会の活動として特徴的なものは、失われた過去を再現するための集まりであるという点にある。会報にみられる語りには、その同窓会のなかで共有される過去の経験が表出されている。それをとおして、当事者にとっての植民地経験により近づいてみよう。

分析の対象としては、「満洲」の学校同窓会のひとつである大連芙蓉高等女学校の同窓会をとりあげる。大連芙蓉高等女学校は、一九四一年に大連で開校した大連で二番目の官立の女学校であり、敗戦をはさんで一九四六年まで存続している。²⁸⁾同窓会の発足は一九五〇年であり、現在の会員数は六七〇名の中規模の同窓会である。

各同窓会の会報は、その団体の規模や形式によって会報の書式も様々ではあるが、基本的には、最近の団体での活動ー主に最近の同窓会の報告ー、会員からのエッセイ近況と思い出をまじえてー、事務局の連絡ー会計報告や他の同窓会との交流などーといった構成になっている。『芙蓉だより』もその形式は同様であるが、編集の役割が小さく、会員個人的エッセイが大半を占めていることが特徴的といえるかもしれない。『芙蓉だより』は、一九九七年に第一三号が発行され、会長の挨拶、先生のエッセイ、一回から五回生まで各回大体二名ずつのエッセイ、事務連絡という構成である。中心は、

²⁶⁾たとえば「大連会の方々」が、近頃、多勢大連へ来られるけれど、残留婦人・孤児その他のことで、勝手知った大連市内を気儘に歩きまわるので、市当局は大連会とは如何なる民間団体なのかと、不審な面持ちでみている。」(岡野繁男「大連の桜」『大連会〈関東州関係者連合会〉会報 盛夏号一九八一No.3』)という発言等が、会報でとりあげられている。

²⁷⁾かつての故郷であった街に、記念のための植樹や時計台といった記念碑的な品物をおくるといった活動がみられる。アンケート、会報等より。

²⁸⁾『芙蓉だより』第一三号、一九九七年。

八〇〇字から一五〇〇字程度の会員と先生のエッセイである。

『芙蓉だより』第一二号（一九九六年）、第一三号（一九九七年）に掲載されたエッセイ二二本（先生三本、会員二〇本）に目をとおしていくと、「満洲」という場所—ここではその学校の所在地であった大連—は、「故郷」として表象されているのがわかる。

「私たちが生まれ育った大連や芙蓉のことは、六十余年経過した今の生活でも何らかのかかわりを持って来ています。単なる郷愁や思い出だけではなく、体内に根づいているものを感じることがあります。」（水戸谷タカ子「旅で思ったこと」『芙蓉だより』第一三号、一九九七）

「なんだかんだといっても、大連にこだわって生きて来ました。帰ることのできない「ふるさと」だからと、自分で勝手に意味づけて、納得しています。人、それぞれ「ふるさと」には誇りを持っていますものね。」（細川澄子「春の日のつれづれに」『芙蓉だより』第一二号、一九九六）

これらのエッセイは、戦後五〇年を過ぎた現在書かれたものであるが、「満洲」経験にかんする語りといってもそこには、「満洲」という場所を日本による植民地として規定し、否定したり、批判的にとりあつかう視点があるわけではない。ここでは、個人的な近況—現在—と、「満洲」時代の思い出—過去—とが結びあわされて語られている。彼女たちにとっての現在と過去を結びあわせるものが、「故郷としての大連」という表現なのである。

一九四一年から四五年にかけて大連の女学校で過ごした彼女たちにとって、そこで遭遇した事件や出来事にたいして似たような経験をしている。けれども、ここでは、そのような歴史的な位置づけを可能にするような出来事や事件にかんする直接的言及は少ない。（唯一の例外として、現地での召集、終戦、シベリアへの移送という経験を描いた先生のエッセイが一篇ある。）背景となっているのは、訓練や作業中心の戦時期の学校生活、ソ連軍の参戦による混乱期の生活、引揚時の情景といった状況であるが、これらの歴史的状況への被害意識、加害意識といったものは表れない。それらをすり抜けて語られているのは、大連での日常生活であり、学校生活のなかの個人的な思い出である。

現在から、過去の故郷や学校での生活を想起するきっかけとなっているものには、花（四篇）、音楽（六篇）、交友（三篇）、童話（一篇）といったアイテムがある。近所の満開の桜を見てふと、「星ヶ浦の桜の花、街中が匂うアカシアの花、授業中に校庭から風につれて、匂ってくるライラックの花、教員室の日だまりに生きてあった水仙の花の匂い」を思い起こす。想起されているのは、歴史的な事件へと焦点化され、確定される記憶ではなく、日常な生活を囲む風景や交友関係、学校生活といった失われてしまった過去の生活のささやかな情景である。このような生活の情景が彼女たちの植民地での生のリアリティをなしているといえるだろう。

ここでとりあげた『芙蓉だより』には、風景や交友関係によって想起される経験と同様に、音楽や歌にまつわる経験も多く語られていた。これらの歌や音楽もまた、自分たち自身が学校で習い覚えたものであったり、日頃口ずさんだりした日常的、個人的な経験にかかわるものである。彼女たちの記述に表わされる生活空間は、女学校や日本人街を抜け出るものではないが、この二二篇のエッセイのなかで、日本人以外の民族の人々が登場するのは、以下の二篇の音楽にかかわる記憶をとおしてのみである。

「もう逃げられず覚悟を決めて息を殺してカーテン越しに見ていると、二十人位の将兵が焚火を囲み酒盛りが始まった。そのうち一人が朗々と歌い出すと何人かがバリトン、バス、とハモるのです。その見事なこと、ステンカラージンやボルガの船歌等知っている歌もあり、夜更け迄続きました。余りの素晴らしさに恐しさも忘れ美しい歌声に聞き惚れていました。残念乍ら一夜限りでした。」（福島美津子「薄れゆく記憶から」『芙蓉だより』第一二号、一九九六）

「数知れぬ出来事はもはや彼方のものになりつゝあるけれど、時折その暗闇の中から蘇ってくるものがある。…幻想即興曲の旋律は遙か昔のことばにならない物語を物語るのです。…ほとんど言葉らしい言葉を発することがなかった彼は、昼休みになるといつも日だまりの窓にもたれて口笛を吹いた。決まってバッハの「G線上のアリア」だった。…私はいつも日本と中国の若者が私の胸に残して行った音楽が鳴っているのを感じるのです。それは抗し難い時代の奔流に消されようとして決して消えることのない光りのように思えるのです。」（三島和子「胸に残していった音楽」『芙蓉だより』第一三号、一九九七）

ひとつは、一九四五年の日本の敗戦後、ソ連軍が大連へ進駐し、襲われないように身を隠しながら聞いたソ連の将兵たちの歌声の美しさであり、もうひとつは、中国への留用者の家族として、戦後の中国で働いていたときの職場の上司であった中国人の若者が吹く口笛である。これらは、植民地の構造的状況と、その崩壊過程をとおして、なお残された植民地における経験の一節、歴史のストーリーとなる以前の経験の断片であるといえよう。

彼女たちは、日本の植民地時代の大連での生活、敗戦による支配権力の崩壊と混乱期、数年間の難民生活をへて日本へ帰国する。このような過程は、国の歴史としては植民地侵略と敗戦、日本政府の大陸政策の進展と崩壊の過程である。植民二世たちはこの大きな歴史の構造的状況に流されながら生きている。ここにはたしかに、植民地の支配—被支配という状況を越えた他民族との交流や、日本人としての自らのまなざしがもつ限定性にたいする省察があるわけではない。

しかし、たとえば音楽というアイテムは、あるひとつの生活の情景について、支配—非支配という

植民地の構造に規定されながらも、大きな歴史の物語としては意味づけされきれないミクロな個人的経験としての断面を想起させるのである。このような断片的な経験の相、物語として確定されない経験が、現在の彼女たちにとっての植民地経験のリアリティなのである。同窓会報における「故郷としての大連」という表象は、このような断片化された経験の相を想起しあう場を支えるものとして機能している。

4. 植民地経験のアンビバレンス

以上のような「満洲」の同窓会の活動は、戦後日本社会での「生活のための共同性」をもつものではなく、また対外的なアピール性の強い「記録のための共同性」を示すものでもない。それは、一言でいえば、「満洲」時代の彼らの日常生活の思い出そのものを語りあうための場所であり、そこで培われる絆は「想起のための共同性」を示すといえるのではないか。自身の記憶を語る相手は、同質の体験をした仲間どうしであり、そこでは、かつての「満洲」時代の人と人との関わりや人と日常世界との関わりが再現される。それらは戦後の日本社会のなかでは否定された植民地における生活世界に関わる記憶である。

ここで語られる「満洲」へのノスタルジアを、植民地化の歴史のマクロな側面、植民者の無意識的な生活そのものが被植民国の人々の生を圧迫するものであることが注視されない、植民者の「楽天的なノスタルジア」として解する見方も可能であろう。当事者による植民地生活の想起の形式は、植民地という状況の「過去の正確な事実」を示すものではない。それは、その日常性にのみ仮託して過去を表出するという想起の形式上の特徴をもつ。

「満洲」への植民者当事者の語りのなかに、このような植民地の構造的状況による植民者個人の生活世界への規定性を指摘することはできる²⁹⁾。このような特徴が植民者の無意識的な領域での加害性の隠蔽といった機能を果たしようという限界を踏まえたうえで、なお、日常性への傾斜という想起のかたちのなかに、植民地「満洲」にかんする言説空間に措ける、理想国家論、傀儡国家論といった歴史のマクロな物語化への消極的な拒否の姿勢を読みとることも可能なのではないだろうか。彼らの「満洲」経験の想起の起点となるものには、音楽や花、植物といった身近の事物、身体感覚的なアイテムが大きな役割を果たしている。それは、マクロな政治的レベル、社会関係上での植民地経験よりも、「満洲」で生きた植民者としての身体感覚という内的拠点を保持しようとする姿勢である。このような植民地経験へのアンビバレントな接近の仕方のなかに、植民地のマクロな政治的、経済的、制度的な構造による規定性のなかでの、植民していった側の人々の日常の生のリアリティが存在している。

²⁹⁾このような視点から「満洲」への植民者のノスタルジックな言説を取り上げたものとして、日本人の「満洲」観光の研究（高、一九九八）などがある。

おわりに

「満洲」の同窓会が共有しているのは、内向きに語られるノスタルジア、素朴な郷土愛とでもいえるものである。それは、植民地の支配民族としての日本人の、植民地世界の風景であるといえるだろう。この意味で、このような記憶は、非常に一面的なものであることを免れ得ない。

戦後に数多く結成され現在に至るまでその植民地経験を機縁にした共同性を維持し続けている「満洲」関連の諸団体は、この植民者としての記憶、植民地へのノスタルジアをその生活世界の領域で語りあい、想起しあう装置として機能している。しかし、これらの諸団体の活動は、それらの記憶を「語り継ぐべき歴史」として現在の世界へと投企するものではなく、当事者同士のうちで共有され、彼らと共に消滅していこうとしている。

本稿では、「満洲」の同窓会の「想起のための共同性」という側面に注目し、この消滅していく植民者の記憶に言及した。それは、植民地以後の歴史のなかで、植民した側の人々の当事者としての経験が、現在どのように生きられているかをみておきたかったからである。それは、日本という共同体のなかでの、植民地経験の現在形でもあるように思われる。本稿の目的は、植民地経験を多層のレベルで捕えることにあり、日本の「満洲」への侵略、支配といった事実を否定するものではない。さらに、「満洲」という植民地の日常性を考えるためには、たとえば、中国の人々にとって、「満洲」という植民地の経験がその後どのように生きられているかといった角度からの検討も必要であろう。今回は資料や調査の都合上日本人の経験の一端を示したにすぎない。今後の課題としておきたい。

資料

〈同窓会会報、定期発行物〉

黒河会会報、一九九七、『あむうる』、第三五号

国際善隣協会、一九九六—一九九七、『善隣』、No228、233、236、239、242—244

大連会会報、一九八〇—一九九七、『大連』、第一号—第四二号

大連二中光丘会会報、一九九七、『曙光』、第二四、二五号

大連芙蓉高等女学校同窓会会報、一九九六—一九九七、『芙蓉だより』、第一二、一三号

楡の実会、一九九五—一九九七、『楡の実通信』、Vol.3、4、6

ハルビン学院同窓会会報、一九九三—一九九七、『ХАРБИН（ハルビン）』第四三、四六—五〇、五三号

ハルビン富士高等女学校同窓会、一九八九—一九九七、『同窓会だより』、九、一一、一五—一七号

奉天楡の実会、一九九四—一九九七、『楡の実会会報』、Vol.12—15

本溪湖会会報、一九九五—一九九六、『本溪湖会会報』、第二二、二三、二四、二六号

満マグ会、一九九五—一九九七、『満マグ会誌』、第二七号—第二九号

旅順高女姫百合会、一九九六—一九九七、『姫百合』、第二五、二六号

〈記念文集、自分史等〉

城戸忠愛、一九九四、『卒寿の坂から足跡を見た 付録海外在留邦人、引揚者運動史』、近代文藝社

新京法政大学同窓会、『南嶺慕情 勁草会創立二十周年記念誌』（一九九三）、『南嶺慕情続編』（一九九七）

大連二中光丘会、一九七四、『晨光 大連二中創立五十周年記念号』

楡の実会、一九九五、『楡の実 奉天一中創立七十五周年記念文集』

楡の実会、『楡の実 新京西広場小学校創立七〇周年記念文集』（一九九六）、『楡の実会 附会員名簿』（一九八六、一九八八）

ハルビン富士高等女学校、『すずらんー終戦の思い出ー』（一九七〇）、『あの時、そして今ー戦後五〇年を記念してー』（一九九五、八回生）

奉天敷島会、『奉天敷島小学校創立九十周年記念誌 附会員名簿』（一九九七）、『創立三十周年記念誌』（一九三八）

本溪湖会、一九九五、『本溪湖名簿 平成7年9月10日現在』

本島公司、一九九六、『私の風景』

参考文献

蘭信三、一九九四、『「満洲移民」の歴史社会学』、行路社

高媛、一九九八、『「大東亜共栄圏」から「郷愁を誘う」旅へー日本人の「満洲」観光ー』、旅の文化研究所『研究報告』No.7

厚生省援護局、一九七七、『引揚げと援護三十年の歩み』、厚生省

越沢明、一九八八、『満洲国の首都計画ー東京の現在と未来を問う』、日本経済評論社

小林英夫、一九九六、『満鉄 「知の集団」の誕生と死』、吉川弘文館

杉山春、一九九六、『満洲女塾』、新潮社

大同学院史編纂委員会、一九六六、『大いなる哉 満洲』、大同学院同窓会

高橋三郎編著、一九八三、『共同研究 戦友会』、田畑書店

竹内好、一九八〇（一九六三年初出）、『満洲国研究の意義』、『竹内好全集第四巻』、筑摩書房

塚瀬進、一九九八、『満洲国 「民族協和」の実像』、吉川弘文館

西沢泰彦、一九九六、『図説「満洲」都市物語 ハルビン・大連・瀋陽・長春』、河出書房新社

原明緒人編、一九八五、『遙かなる大地2 満洲再見』、教育書籍

原政子、一九九五、『満洲っ子気質』、『思想の科学』No.33

満洲移民史研究会編、一九七六、『日本帝国主義下の満洲移民』、龍溪書房

満洲回顧集刊行会編、一九六五、『あゝ満洲 国づくり産業開発者の手記』、満洲回顧集刊行会

満洲国史編纂刊行会編、一九七〇、『満洲国史・総論』、満蒙同胞援護会

満洲国史編纂刊行会編、一九七一、『満洲国史・各論』、満蒙同胞援護会

山室信一、一九九三、『キメラー満洲国の肖像』、中公新書

山室信一、一九九七、『政治社会における倫理 忘却と未到の間で』（河合隼雄、鶴見俊輔編、『現代日本文化論9 倫理と道徳』、岩波書店）

山室信一、一九九八、『植民帝国・日本の構成と満洲国ー統治様式の遷移と統治人材の周流ー』（ピーター・ドウス、小林英夫編『帝国という幻想』、青木書店）

山本有造編、一九九五、『「満洲国」の研究』、緑蔭書房

楊大慶、一九九八、『歴史家への挑戦ー「南京アトロシティ」研究をめぐるー』、『思想』No.890

ヨネヤマ・リサ、一九九六、『記憶の弁証法ー広島』、『思想』No.866

（さかべ しょうこ・博士後期課程）

表6 満洲関連団体一覧(1)

団体名	発足 (年)	会員数 (人)	会報	会報のタイトル	発行 (年)	活動内容	会の性格	出版物その他
香の会	1941	350	無			毎年各場で同窓会	奉天育英女学校、奉天育英女学校、奉天大和高等女学校同窓会	
社団法人国際華僑協会	1941	1570	有	「華僑」	1960	華僑事業、学統事業、中国問題研究所その他		
大連会	戦後すぐ	20000	有	「大連」	1960	親睦、大連市との友好交流		
あけぼの会	1946	2700	有	「あけぼの」	1960	親睦と連絡	奉天朝日高女同窓会	
大連二中光丘会	1946	1800	有	「曙光」	1985	会報発行年二回、総会運営年一回、母校訪問		「曙光 大連二中創立五十周年記念号」(1974年)
麗仁会	1947		現在無	「麗仁会」	1950			「麗仁会史」(1961年)あり
筑前中学校校友会	1948	1300	有	「桜桂会報」	1990	親睦、隔年一回総会、節目毎記念大会		他に会報三冊
他の実会	1948	1600	有	「他の実会会報」	1983	会員の親睦が目的	旧奉天第一中学校卒業、在校生の同窓会	「他の実 奉天一中創立七十五周年記念文集」(1995年)
鞍山高女白百合会	1949	1000	有			支部総会年一回、全国大会三年に一回、名簿発行五年毎	白百合会—満洲鞍山高女学校同窓会(1938年、1300名くらい)	
国聯運輸社員互助会	1949	1200	有	「青陽」「近畿青陽」	1955	高野山に般若講開設、年一回般若講を記行		
旅順高女桜百合会	1949	1891	有	「桜百合」	1952	隔年毎同窓会、毎年会報発行		
曙光会	1950	321	現在無			隔年に同窓会	新京曙光小学校同窓会	
大連英華高等女学校同窓会	1950	670	有	「芙蓉だより」		会員の親睦		「残留留児、婦人の手助けをする人も」
奉天教島会	1950	600	有	「奉天教島会」		年一回の総会 記念誌	奉天教島小学校同窓会	「奉天教島小学校創立九十周年記念誌」(1997年)
新京師範広慶会	1951	367	有	「広慶会会報」	1991	年一回の総会と懇談旅行	新京師範学校同窓会	
大同学院同窓会	1951	500	有	「会報」	1954			出版物「満洲有様」
錦ヶ丘会	1951	1400	有	「錦ヶ丘」	1952	会員の親睦が主	新京錦ヶ丘高女同窓会	
曙光会	1952	500	有	「曙光」	1953	年一回総会(親睦パーティー)。各期はそれぞれ	新京曙光小学校同窓会	
ハルビン学院同窓会	1952	600	有	「ХАРБИН (ハルビン)」	1997	年三回の会報発行、年一回同窓会総会、月一回役員会 ロシア(蘭)関係の研究奨学金(上智大学・ハルビン学院顕彰基金)		
坂田同友会	1953	86	無			年一回会員の親睦会	「満洲国駐日大使館関係者の会、満洲本国経営者なし」	
大連昭和高等女学校同窓会・結便会	1954	770	有	「結便会会報」		二年に一度同窓会		
麗国大学同窓会	1954	474	有	「麗国大学同窓会会報」	1954	名簿作成二年一回、会報発行年二回、麗大資料委員会、日中韓同学? 教員五年毎、海外同窓子女奨学生? 出		
大連高女錦ヶ丘会	1955	700	有	「錦ヶ丘会会報」	1989	各年毎の同窓会、一年一回の会報発行		
大連朝日小学校同窓会	1955	2000	無			五年毎の同窓会、会員名簿の発行		
大連静浦小学校校友会	1955	700	無			二年に一回の合同同窓会の開催		
南満洲工業専門学校同窓会伏水会	1955	1200	有	「伏水会報」	1961	名簿の整備、会報の発行、会員相互の親睦のための各種行事開催		
ハルビン富士高等女学校同窓会	1960	1420	有	「同窓会だより」	1980	二年に一度同窓会(総会)		「すずらん—終戦の思い出—」(1970年)、「あの時、そして今—戦後五〇年を記念して—」(1995年)
黒河会	1961	78	有	「あむうる」	1961	会員の親睦	「満洲国交通路の親睦団体」	
他の実会	1964	1150	有			年一回の全国大会	新京西広場小学校同窓会	「他の実 新京西広場小学校創立七〇周年記念文集」(1996年)

表6 満洲関連団体一覧 (2)

団体名	発足 (年)	会員数 (人)	会報	会報のタイトル	発行 (年)	活動内容	会の経緯	出版物その他
青龍会	1965	10	現在無		1965	1985年28名で八日間渡中	「熱河省(現河北省)青龍県に残留した邦人により結成」。当時は100余名	
大連甘井子小学校同窓会	1965	600	無			三年に一度全体の同窓会		学年毎の文集あり
大連大広場小学校同窓会	1965	1800	有	「大広場」	1991	会報、会誌の発行、同窓会の開催、母校訪問旅行 実施、他同窓会との交流		
奉天春日小学校同窓会	1967	1000	有	「松の緑」	1967	1. 満洲母子連帯の設立協力、2. 中国留学生後 援会への協力		
特情会	1968	201	有	「特情会報」		年一回総会開催		1982年、第二版空軍特種情報雑誌「わらじ作りの記」 を刊行
奉天城東会	1969	400	有	「にれ」	1972	年一回総会、懇談会、機関紙発行、会員の弔意募 集、その他ミニ結東会の開催など	奉天城東小学校同窓会	
奉天加茂小学校同窓会	1970	900	有		1975	二年ごとに同窓会開催、記念誌、名簿作成		「加茂小学校記念誌」(1999年発行予定)
本溪湖会	1972	950	有	「本溪湖会会報」	1972	日中友好、会員の親睦		
滿鉄互恵店駅々友会	1973	100	無			近畿、中国、四国、九州のブロックで二年、三年 位に会合を開く	会員は「駅勤務者全員」	
滿鉄大連埠頭車庫区会	1974	52	無			毎年三〇名内外の集まり		
哈商會	1974	250	有	「興?大陸」	1974	全国大会、会報、情報交換、相互扶助	ハルビン商業学校同窓会	
元關東局曹長海軍省遺族会	1976	160	有	「遺族会会報」	1984	会員の親睦、毎年一〇月に八王子市の東京重慶で 慰霊祭を執行		
大連南山麓小学校同窓会	1979	450	無			名簿作成、毎年一回の同窓会(東京、地方の隔年 毎)	大連南山麓(尋常、高等)小学校 (国民学校)同窓会	
佳木斯市大和在満国民学校同窓会	1981	77				年一回東京で同窓会		記念誌「寒い北風吹いたとて」(巻一1995、巻二 1997)
大連春日小学校同窓会	1982	818	有	「春日」	1982	親睦行事、総会、大連旅行一母校訪問と交流		
礼蘭屯小学校同窓会	1983	110	有	「すずらん」	1990	北滿旅行、礼蘭屯回顧録の発行、毎年の総会、礼 蘭屯訪問四回、年報の発行		
大連向陽小学校同窓会	1985	750	無			二年毎の全国大会		五〇周年記念会誌「ひまわり」
新京医科大学同窓会 圭泉会			無					
南嶺会			無			一般的同窓会の範圍	新京第二中学校同窓会。第一回卒業 1944年	
在日同学会		20	無				「北京大学農學院にいたもの」。満洲 とは直接関係なし。	「遼東老殘記 国立北京大学農學院への回想」 (1991年、非売品)
輔仁会		450	有	「輔仁」	1965	年二回会報をだす	満洲医科大学輔仁会	
録の里会							「引揚者政治運動」関連	
満マグ会		210	有	「満マグ会誌」	1969	会誌年一回発行、名簿2年に一回発行、全国大 会。二年に一度開催、各地区での懇談会	「満洲国官口市でマグネシウムを生産 していた満洲マグネシウム株式会社の 旧社員と家族でつづっている会」	
新京法政大学勸業会		300	無			二年に一度の全国大会開催		「南嶺事情 勸業会創立二十周年記念誌」(1993 年)、「南嶺事情続編」(1997年)

A Case Study of “Manchurian Dousou-Kai (Reunion)”: From the Perspective of Historical Sociology

Shoko SAKABE

Many colonial studies have been described by the terms of political economy. The historical studies about Manchuria in the postwar Japan follow suit: they mainly deal with the side of puppet state with regard to the past colonial situation of Manchuria. Consideration of everyday life in colonial situation has been neglected. My purpose in this paper is to address that side. As the first step in this paper, I discuss the “Manchurian Dousou-Kai (reunion),” postwar spontaneous associations composed of Japanese colonizers to Manchuria.

In 1997, I conducted a survey. I sent a questionnaire to 119 Associations and received answers from 53. The answer rate was 49.6%. According to the results, these associations are roughly divided into three types. The first group includes 39 associations composed of members who graduated from the same school in Manchuria. The second type has 8 associations composed of members that had been employed at the same place. The third group has 3 associations which are composed of members who lived at the same place in Manchuria.

These three groups have similar activities. According to the responses to the questionnaire, their purposes are (1) to cultivate the present friendships, (2) to relive their past lives by making a list or a map in those days, and (3) to satisfy their nostalgia by visiting to China or the school they attended. These activities apparently show “the optimistic nostalgia” and resemble other popular “Dousou-Kai” which cultivate the present friendships through remembering their past. But when we consider the tendency of their narratives (which are limited on the side of everyday life) against the postwar context of the discourse concerned with colonial Manchuria, we will find these activities of “Manchurian Dousou-Kai” have another way to make sense of their personal Manchuria Experience.

Even after war and the colonizers return from Manchuria, the stories to idealize Manchuria State as a big state founding history has been told among Japanese colonizers to Manchuria. On the other side, the act of remembering personal experiences within his/her everyday world passively denies contextualizing his/her personal experiences into the overall history. This is an attempt to preserve his/her inner place to recognize his/her colonial life.